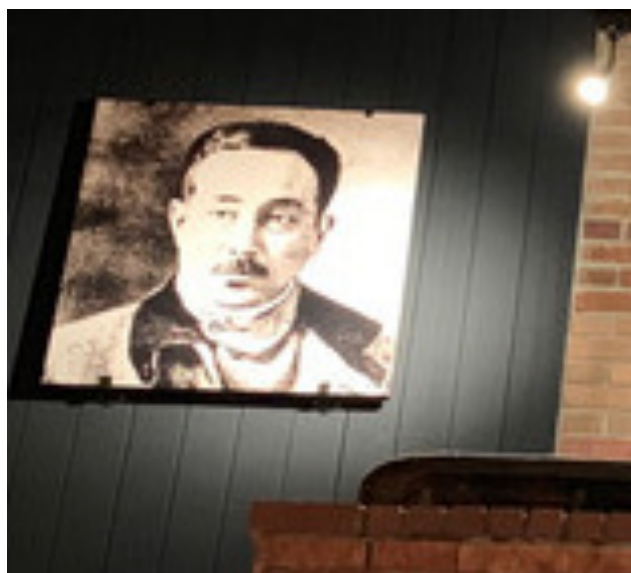


土香る会

読書会感想文集 Vol.36



2021年6月/7月

【目次】

第39回読書会(2021.6.19)

第40回読書会(2021.7.17)

有島武郎『奇跡の咀』『片端者』・・・P1～

※ 土香る会が毎月行っている「読書会」に参加した方々が寄せた、感想文と報告を掲載しています。

Vol.29からは、有島武郎の作品でまだ読んでいなかった小説の読書会、
いわば第4シリーズの読書会感想文集となりました。

●問合せ先／土香る会事務局(有島記念館内)0136-44-3245

第 39 回読書会のまとめ

『奇跡の咀』『片輪者』

1 回目 20210619、2 回目 0717

参加者：1 回目 5 名、2 回目 4 名 感想文提出：6 名

今回の作品をドタバタ風だと評した人がいました。悲劇そのものはそれほど悲劇的ではないが、喜劇は人間心理をえぐり出し悲哀感がいや増すと言われます。喜劇仕立ての方が読者により深く考えさせる材料を提供できるということなのでしょう。そしてその通り、いろいろな観点からの話し合いができた読書会になりました。

『奇跡の咀』(T6. 10)とその約4年後に書かれた『片輪者』(T11. 1)という二つの作品。「一つの物語を二つのスタイルで書いたことにどんな意味があるのか」「なぜ有島は二人の主人公を悪人として、しかも2作目はより悪人らしく描きたかったのか」という問いかけがありました。さらには「作品発表が創作エネルギーを失っていた時期のもので、新しいものが用意できず、やむを得ず改作して依頼に間に合わせたのだと思われる」と自分の答を用意した感想もありました。

戯曲スタイルと掌編小説スタイルの分量を比べてみると、小説の方が半分以下です。そして、これらに対する答になる意見が出されました。曰く「後者は前者を基に児童向けに書き直したものである。」何だ、そうなのか、と拍子抜けする間もなく、児童文学に対する有島の考え方が披露されました。これまでの児童文学作品は子供の心持ちを標準として書いたものがない様に思えた。子供の世界はこういうふうだ、こうあるべきだ、これがよいと大人が考えて子供に提示しているが、そうであってはいけない、というものです。この考えから有島は2年間(T9. 8~T11. 8)に6つの児童文学作品を立て続けに書いており、『片輪者』もその一つということでした。

とは言え、何故二つの作品を書いたのかと考えた読者にとっては無駄な努力ではなく、より深い読み方になったと信じています。

『奇跡の咀』は巧みな構成だという感想がありました。A、B、甲、乙という四人の登場人物が同じ場面で会話をすることがないように作られている。また、最初の甲とAの対話からAとBが互いに嫌悪していることが知れるが、最後のAとBの対話で実は二人が初めからつるんでいたことが明かされる。このどんでん返しのところが構成上のミソで作者の工夫だとの指摘です。対話を通して話題が提供され、話題がリレーされるに従って次第に奇跡の全貌が明るみに出てくる。緊張感をはらみつづどのような事件が起こるか観客をはらはらさせる。ということで、この読み方には一同感服しました。

題名で悩んだ人がいました。「咀」は「かむ、かみ砕く」意味で「呪い」のことではない。のろいであれば「詛」がある。ところが有島は文中で「咀」に「のろい」とルビを振っている。この意

見は皆が気付かなかったことでした。あまり深く考えず、有島独特の漢字の当て字だろうと思っていたからです。その人は「神のもたらす超自然の出来事であって、同時に神が人を呪う出来事」と題名を解釈したのですが、詳しくは感想文をお読みください。

作品は障害者二人が主人公です。当然ながら話は障害者と差別の問題に向かいます。どんな社会でも障害者は存在します。だから障害者のいない社会はその人たちを排除しなければ実現しません。施設を作って物理的に隔離したり、神の奇跡に頼ったりして人の目に触れないようにするわけです。インクルーシブ（包み込むような）という、排除とは真反対の考えがあります。例えば学校教育では、障害を持つ児童生徒を支援学級ではなく、他の子供たちと同じ学級（親学級と呼ぶ所もあります）に入れるという考え方になります。排除していれば、付き合い方や何かあったときの対処法が分からないので差別感、差別意識が生まれてしまうからです。

ここまで来たところで「障害者」とは誰のことを言うのか、という問題が出ました。参加者の中に、子供の頃祖母が「健常不具者」と言っていたのを覚えているという人がいましたが、他の人にはその言葉は初耳だったようです。障害がある人の呼び名は障害の場所によって変わりますが、別の参加者は目が不自由な人なら近視や遠視、乱視や老眼でも当てはまるが、その人たちを障害者とは言わないのでは？と疑問を投げかけました。年を取ると様々な不便を感じますが、物忘れがひどい、徘徊する、同じ話を何度も繰り返す人を障害者と呼んでいる人はいません。どこからが障害者に該当するのか、その線引きは法律によるのか、割と大雑把に各人によって違うものなのか、見た目で判断するのか。ある意味では誰もが障害者と言えるという意見も出ました。身体面だけでなく、心の問題や考え方、境遇（生活環境）などが他の多くの人と異なるものを抱えていたりするからですが、それに対して皆さんはどうお考えになるのでしょうか。

さらに話し合いは差別語や放送禁止用語の問題へと進みます。作品に関して「現代では使用できない差別語満載の作品」という感想がありましたが、いろんな言葉が差別語指定を受けていくので、昔読んでいた児童文学や昔話を見かけなくなったとか、食べ物（飲料水やおやつなど）も名前が変わったり、商品そのものが消えたりしていった話も出ました。また、乞食（こつじき）や托鉢（たくはつ）のように、時代が進むとともに本来の意味から遠ざかり、差別的になっていった例なども挙がりました。

昔から当たり前に使われていた言葉の中にも、嫁（夫の家に入ってくる女）とか婦（箒を持って立つ女）のようなあからさまに男尊女卑と分かるものの使用を避ける傾向にあるとの指摘もありました。嫁に関しては、ニセコでは男性が自分の妻のことをそう呼ぶのを今でもよく聞くのでびっくりした覚えがあるとか。全国では自分や話し相手の配偶者を何と呼ぶのかで盛り上がりました。旦那、亭主、主人、奥さん、かみさん、などなど。使われている言葉のほとんどは男女平等（ジェンダー平等）の名前ではありません。互いに下の名前で〇〇さんと呼び合っている人を知っているという情報や、話し相手の配偶者のことを「夫さん」「妻さん」と呼ぶのが新しい傾向だという意見も出ました。

以上を大きくまとめると、言葉は時代とともに受け取り方が変化していくものであり、禁止した

り言い換えたりすることで差別意識がなくなるものではない。それはむしろ悪い方向、表面を取り繕って差別意識を温存していく方向に拍車がかかるのではないかということでした。

障害者とか差別という問題を作品の中で考えるとどうなるでしょうか。ある人は、有島の作品の中に出てくる町の住人たちは一切の障害が存在しないかのように見せる「奇跡」を求めている、と言いました。障害者をそのまま受け入れるのではなくて、聖マルチン像という尊像の奇跡によって障害が治り、障害者のいない社会が実現されることを人々は望んでおり、これこそが作品の大きなポイントだと言うのです。これはとても鋭い指摘だという意見がありました。

もう一つ、読むときに考えるべきこととしてある人から提起がありました。それは作品の描く時代における社会の仕組み、つまり舞台となる町が障害者と町の住人と基督教会の三者が互いに依存している社会だとの指摘です。どういうことでしょうか。

障害者（の主人公）は、健常であることは神から咎められていないことだと言うことで、健常者の優位性を保証している。町の住人（の登場人物）は、障害者に対して優位にある者として寛容に振る舞い、恩恵を与えるから、障害者が存在しなければ神への愛が証明できないという相互依存。さらに基督教会共同体は障害者も町の住人も共に神と教会に従うものとして遇する。こうして教会を中心とした三者の関係が維持されるという構造です。こうした社会全体の掟（＝共同幻想）で社会は成り立っているのですが、主人公の二人の障害者はその共同体に対して戦略的な掟破り（住人たちを騙すこと）をしており、そこには共同体が崩壊するきっかけが隠れているとの指摘が続き、それには感嘆の声をあげるしかなかったのですが、同時にそういう深い構造を持つ重層的な作品を書いた有島の評価も一気に跳ね上がったのでした。

さて、提出される感想文の中にはいろいろなスタイルが見られます。今回のユニークなものとしては、江戸時代の滑稽本、はたまた太宰治の「お伽草子」を思わせる感想文が挙げられます。本人曰く、どの昔話を使うかで苦労した。有島の冗談めいた文体を真似しようと思ったそうで、その甲斐あって、昔話と有島作品がうまく溶け合っているという感想がありました。話の中で「ホイド」（物乞い、乞食）が登場して、破れかけたマントを取り出す場面がありますが、これは聖マルティンがローマの兵士だった頃、物乞いを見て与えるものが何もないので自分のマントを切り裂いて半分を物乞い（実はイエス・キリスト）に与えたという「マントの伝説」を踏まえたもの。単なるお伽話でないところがすごいとの声も出ました。ちなみに、「ホイトっ子」という言葉を子供の頃聞いたことがあるという参加者がいました。ホイドとかホイトは北海道や東北北部の方言だそうです。

その他の話題です。

日露戦争後に傷痍軍人が現れ、大きな社会問題になったという情報から、有島も見ていたはずだから作品の着想としたのかもしれないという意見が出ました。

催眠術ブームが昔あったという話が出ました。一時期、透視法やスプーン曲げなどの特殊能力が

TV で盛んに取り上げられたので子供の頃に見ていたという話で妙に盛り上がりました。年齢が知れてしまいます。(文責：井上剛)

※参加者：磯野浩昭、磯野美和、井上剛、梅田滋、高木直良（五十音順）

※感想文のみ参加：玉田茂喜

※以下感想文の掲載順は、概ね当日の発表順です。

むかしむかしあるところで～奇跡の祝福（改版）

Ish.

昔々あるところに、二人のペテン師がおったそうな。一人は片輪者之丞（かたわ もののじょう：K)

、そしてもう一人は珍齒毘小之介（ちんば びこのすけ：C）と申して、人を騙しては大層なお金を巻き上げる、それはそれは、とんでもない者達じゃった。

<エピソード1>

K 「それにしても最近、稼ぎが悪いねー。」

C 「そうだねそろそろ此処も、潮時だね。」

K 「お前さん知ってるかい？何でも竜宮城ってところがあって、そこへ行くと、宝物があるって噂だよ。」

C 「そこにはどうやって行くのさ？」

K 「何でも、海岸でカメを助けると、連れてってくれるそうだよ。」

C 「人を騙して稼いでるのに、何でカメを助けなきゃならないんだよ！」

K 「でも助けたら竜宮城だよ。お宝がっぼがっぼだよ。」

漸く二人は、長い旅の果て、カメがいるという、海岸に辿り着いた。

カメは何処だい。お宝のカメは何処だい・・・

二人は大きな声を張り上げカメを探していた。

すると子供たちが丸座になって、何かをしているのが目に付いた。

二人が寄ってみると、大きなカメを子供達が虐めているではないか。

したとばかり。子供たちにカメを虐めてはいけませんと諭し、カメを海へ返してやりました。

K 本当に竜宮城へ行けるんだろうな？

C ちょっと心配になってきた。ここまで来るのに大層お金を使ったしな。

海岸で途方に暮れていたところへ、海の中から、カメがやってきた。

カメ 「さっきは助けていただきありがとうございます。お礼に竜宮城へお連れ致します。どうか私の背中に乗ってください。」

K 「やっぱり俺は行かない。泳げないんだ。お宝を持って帰ってきてくれ。俺は待っている。独り占めしたら承知しないからな。」

C 「それじゃお宝をがっぼり貰って帰ってくるからな。」

毎日のようにタイやヒラメの舞い踊り、時間のたつのも忘れて、食っちゃ寝の日々・・・

C 「そろそろ飽きてきたな、もう3日もたったかな。Kに宝物を持って帰るとするか・・・」
すいませーん、乙姫さん、お愛想お願いします。」

乙姫 「お土産に、この玉手箱を差し上げます。でも決して開けてはなりません。」

Cが海岸に着くと、辺りの景色が全く変わっていました。

暫く辺りを見回し、Kを探していましたが、直ぐに諦めました。

C 「しめたもんだ、Kはいないし、宝物は一つ。」

「この中に何が入っていようと、自分一人のものだ。」

「しかし何が入っているのだろう？」

「そういえば、乙姫が変な事を言っていた気がするな。決して開けるなど。」

「きっと高価なものが入っているに違いない。」

Cは玉手箱のヒモを解き、蓋をとった。・・・

C 「ゴホゴホゴホ・・・何か身体がだるい、あちこち痛い、動くのも辛いの一。」

「さてよ、ますます見すばらしくなったということは商売にはうってつけじゃ。」

「300年後の世の中、お金持ちはどっちにおるじゃろう・・・」

「商売繁盛・・・さてカモはいずこに・・・」

<エピソード2>

K 「あれっつ、その大きな桃どうしたんだよ？」

C 「ほら、そこの川から流れてきたんだよ、ドンブラコ、ドンブラコッコ」

K 「早く食べよう。腹ペコなんだ。」

C 「ナイフはないか？」

K 「ちょっと待てよ、こんなに大きな桃、高く売れるんじゃないか？」

C 「でも俺は桃が大好物なんだ。やっぱり食べよう」

スパーン。オギャーオギャー・・・

二人は驚いた。まさか桃の中から、赤ん坊が出てくるとは・・・

<エピソード3>

K 「見てみろよ、変な恰好をした子供が、犬と、雉と、猿を引き連れて歩いてるぞ」

C 「何処？」

K 「面白そうだから、からかってやろう。」

C 「これこれそこの坊や、いったい何の騒ぎなんだい？」

桃 「これから悪い鬼を退治に行くんですよ。」

「そして人々から盗んだ、金銀財宝を取り返すのです。」

K 「私達もお手伝いしましょうか？、悪い奴らを懲らしめるのも僕らの使命ですから」

「いやいや決して見返りを求めるんじゃないありません。」

是非私たちも、連れて行って下さい。」

桃 「でもお二方、お身体が不自由ではないですか？、大丈夫ですか」

C 「この通り、本当は、何処も悪くはないんです。大丈夫です。ほらこの通り」

そういつて二人は、まるでラジオ体操の様な動作で身体を軽快に動かした。」

桃太郎は怪訝そうな顔で彼を見ていたが、戦力が多いほうが良いと判断した。

桃 「それでは、私達についてきてください。黍団子をどうぞ力がつきますよ」

鬼が島に着いた一行は、鬼を退治し、金銀財宝を手に揚々と、家路につきます。

もちろんCは陰に隠れて、全てが終わった後に一行の元に加わったのは、ご想像の通りです。

一行は家に帰ってきました。お爺さんとお婆さんが満面の笑顔でお迎えです。

桃太郎、皆さんありがとう。この宝物で村も救われるでしょう。

本当にありがとう。めでたしめでたし。おわり・・・じゃありません。続きがあります。

Kはお爺さんの方へ駆け寄り、小声で、「私たちは遠方からはるばる、神様の遣いとしてやってきたものです。

たまたま、桃太郎さんとお会いして、鬼退治に参加いたしました。ありがたい神様の元へ、お供え物を届けなければなりません。どんなものでも構いません。どうかよろしく願いいたします。」

爺 「それはそれは、その不自由な身体で、大変感心なお人じゃ、少々お待ち下され」

お爺さんが、宝物が置いてある部屋へ入ってみると、何という事でしょう。

物置小屋が空になっているではありませんか。

村人 「お爺さん、大変だ。知らない男が、宝物を持って逃げた」

C 「ヘツヘツへ。これだけあれば遊んで暮らせる。」「これだけの量だ、とりあえず何処かへ隠してほとぼりが冷めたら、残りをとりに来よう。」

そのころ村では、宝物は何処へ行ったと、それはそれは大変な騒ぎになっておりました。

K 「畜生、Cの奴、どこ行きやがった」

爺さんから貰った黍団子にかぶりつき、もしやもしややりながらも、悪態は続き・・・

「あれだけの宝物だ、何処かへ隠しているに違いない。しかし何処へ行った、ペテン師め」

桃 「良かったKさんここへいらしたんですね。あなたのお連れさんが、宝物を盗んで北の方へ向かった

そうです。これから一緒に、追いかけてみましょう。」

そのとき、雉が舞い降りて、ここから1里先に、あいつがいる。と桃太郎に報告しました。

C 「さーここまで来れば大丈夫だ。ちょっと一休み。」

草わらに胡坐をかき、黍団子を食べておりました。

遠くの方から、犬の鳴き声がこちら側に近づいて来ました。それがだんだん大きくなり、ついには、Cに噛みついていた。

C 「いたたたたっ助けてくれ、どうかご勘弁を一、宝物は全て返します」

K 「あっつ、こんなところに居やがった。宝物を返せ泥棒。」

桃 「宝物を返しなさい。返したら、罪は咎めません。」

C 「ありがとうございます。もう、決して盗みはいたしません。」

桃太郎一行は村へ戻った。二人は彼らが視界から消えるのを待って。

K 「残りの宝物は何処だ！俺は知ってるぞ。」

C 「あれで全部ですよ。」

K 「嘘を付け、俺の目は節穴じゃないぞ！」

えらい剣幕でCの胸首を掴み強く締め上げた。

C 「わかったわかった乱暴はしないでくれ、その代わり半分は自分が貰う。それでよいならありかを教える。」

K 「わかった、それじゃ案内しろ。」

C 「確かこの洞穴の中に、隠したんだが、見当たらない。」

冷や汗を拭いながら何度も場所を確認しているCを見ながら、

K 「お前さんウソついてるだろ！嘘をつくとりくなくはないぞ・・・さっさと場所を教えろ」

C 「あっつ、洞窟の奥の方まで、大きな足跡が続いている。」

二人はそれを辿っていくと、人の気配がした。

K 「お前は誰だっつ」

見ると蠟燭に照らされたその顔は、煤けて汚く、それはそれは見ずばらしい男が現れた。

ホイド 「俺はこの洞窟の主、ホイド様だ。お前達こそ人の家に黙って入ってきて、どういうつもりだ！」

K 「私は、片輪者之丞、こちらが珍齒毘小之介と言います」

ホイド 「それで何の用だ」

C 「その角が丸い岩穴に、宝物が入っていませんでしたか？」

ホイド 「何だそんなことか？あるよ。ところで宝物をどうするんだ？」

K 「はい、私は故郷のサンマルティン様に御使いする予言者でございまして、その供物として宝物を頂き、持ち帰る事が使命でございまして。宝物を頂けないでしょうか？」

ホイドが手をかざすと、見る見る金銀財宝が、現れました。

二人はそれをただ茫然と見ていました。

C 「あなたはもしやサンマルティン・・・」

K 「サンマルティン！」

気が付けば、今まで眩しいほど光り輝いていた宝がただの鉄屑、ゴミになった。その中からホイドが半分破れかけたマントをCに渡し、こういった。

ホイド 「これは私がローマの兵士に貰ったものだ。大事に使うが良い」

そう言い残し、跡形もなく消えていった。Cの手には千切れたマントが握りしめられていた。

C 「サンマルティンの物はサンマルティンに、神の物は神に納めよ。」

その言葉が、心に、まるで彼の舌に刻印されたかのように低く、はっきりと響いた。

そして喜びの涙を、浮かべたかと思うと、次の瞬間、能面の様な冷たい表情に変わり、Cはそこに大きく項垂れ動かなくなった。

K 「お前、どうしたんだ！大丈夫か？変な事を言ってたけど？おい大丈夫か？」

C 「・・・」

C 「マタンサ・・・」

K 「えっつ何だって？」

C 「それぞれのブタにサン・マルティンの日が来る」

K 「えっ、何だって、ブタだって、それは誰の事だよ！」

Cは、すっと立ちあがり、悲しげな眼差しで、Kを一瞥し、そこから去って行った。

取り残されたKは暫く茫然としていたが、ゴミの中にお宝が残っていないか、未練がましく漁り続けた。

すると、足元にデナリウスが落ちているではないか。

K 「チェッツ。これしかないか。もっとないかないかないかないか・・・」

1デナリウスでは精々もって一週間分のパンにしかない。ここに至るまで、結構な金を使っている。

必死になって足でほじくり、最後は爪が折れ、手が血だらけになるまで、土を掘り起こし、気が付けば千切れた布切れで、汗だらけの顔を拭いていた。

Kは悪態を散々はいた挙句、いつの間にか握っていたその布切れをポイっと捨て、名残惜しそうに、洞窟を後にした。

彼が捨てた布切れの下には、持ちきれないくらいの財宝が、怪しく煌めきながら、虚しい光を発していた。

『奇跡の咀』『片輪者』

Ino.

〈はじめに〉

二人の主人公を含めた町の人々が尊像のご利益を信じているが、尊像が町にあってこそ効き目を発揮するという設定の妙により、ご利益を一番望んでいない二人にも実際に効き目が現れるというドタバタ風の戯曲及び掌編小説になっています。遠藤周作が「狐狸庵閑話」（関西弁の「こりゃあかんわ」のもじり）を書いたように、有島も冗談めいたものを書きたくなったのでしょうか。人を騙して自分だけが旨い汁を吸おうと思ってもそうは問屋が卸さないという話でしょうか。天網恢々疎にして漏らさず？自業自得？そんな道徳的な話を書きたかったのではないはずだと思うのですが…

〈構成〉

『奇跡の咀』が大正6年に『片輪者』が大正11年に発表されたが、なぜ5年後に同じテーマで書き直したのでしょうか。分からないので取り敢えず二作品の構成を見えます。

『奇跡の咀』 戯曲 18 頁

(1) 三幕物 ①その日の1年前 (10 頁)

甲宅にて：A と 甲 (1.5 頁) A と 甲 と 乙 (2 頁) B と 甲 と 乙 (3 頁弱)

甲 と 乙 (1 頁弱)

②その日の午後 (5 頁) A 宅にて：A と 乙 (3 頁) 甲宅にて：B と 甲 (2 頁)

③その日の夜 (3 頁) A 宅にて：A と B (3 頁)

(2) 登場人物 A、B、甲、乙 (甲と乙は母娘)

(3) 設定 第一幕では、甲はAを信じ切っていてBを悪く思っている。同時にAも甲に対してBには用心しないとイケないと言う。また、乙はBを信じ切っていてAを悪く思っている。第二幕では、乙がAの家を訪れてそれまでの非礼を詫げる。また甲もAからBが立派な人物だと保証してもらったので、甲宅を訪れたBにそれまでの失礼を詫げる。第三幕になってAとBの企みについて明かされる。

『片輪者』 掌編小説 7 頁

(1) 場面転換 「そうやっている中に」(p150 2行目)という言葉により、前半のそれまでの経過(3頁)と後半の当日の出来事(4頁)に分けられている。後半はジャンとピエールの会話で事が運ぶ。

(2) 登場人物 ジャン(ト占者)とピエール(巡礼)

(3) 設定 ジャンは、信者が増え、大層な金持ちになって金の力で町の重だった人を自分の手下のようにして恐ろしく偉い人間だと思われている。ピエールは、正直で可哀そうな片輪者らしく見せかけている。町の人々が奉納するお金や品物を袋に入れて尊像のある険しい山に登ることになっていたが行くのはその麓までで、人々が奉納したものはみんな自分が盗んで贅沢をして暮らしている。

有島はどちらの作品も二人の主人公を悪人として描いています。ただ、『奇跡の咀』では乙（娘）に、

「この町の人達がお蔭で仕合せになりましたり、私共の母もこの頃貧しいながら安心して暮して参れますのも皆んなあなたのお不思議なお力のためで御座います。」(p197)

と言わせているように、町民からの信頼を得ているような書きぶりがまだ見られます。他方『片輪者』では、ここまで露骨に書くかと言わんばかりの描写があります。より悪人として書かれているのです。

「自分達が不幸な人間だということを悲しんで、人間になりたいと遠くからでも聖者に願かけをしたらよさそうなものを、そうはしないで、自分が片輪に生れついたのをいいことにして、人の情けで遊んで飯を食おうという心を越しました。」(p148)

なぜ有島は二人の主人公を悪人として、しかも2作目はより悪人らしく描きたかったのでしょうか？

多くの町民は障害を持つ人を見ると情けをかけようとします。少しでも役に立てば嬉しいのです。また、宗教心もあるようで喜んで寄進をします。この二つのことを同時に満たすことができるのが、例えばBに対する寄進です。自分が大事にしている物を尊像の所まで自分の足で山に登って持っていけばいいのに、そこまで大変なことをしたくないので、自分が行くと言うBを利用しているわけです。まさかBが寄進した物を自分のものにしてしまうと誰も思いませんから、役に立ったことを免罪符にしているようにも思われます。では、町民を騙しているBがしていることは悪いことでしょうか。

Aはどうでしょう。人は誰もが弱い存在ですから、自分が心に抱えている事を誰かに聞いてほしいと思ったり、相談を持ちかけて何らかのアドバイスをもらいたいと思っています。でもほとんどの人は自分のことで精一杯で耳を貸してくれません。ところがAは熱心に聞いてくれます。聞くことで心を開かせ、自分の味方にさせるのが狙いだからです。そんな意図は分かりませんから、聞いてもらった人は信頼を寄せて喜捨までします。では、町民を騙しているAがしていることは悪いことでしょうか。

AもBも心に悪だくみがありますから悪いと言えそうですが、兩人とも町民の役に立っている面があることは見逃せません。多くの人間は善人と悪人の両面を併せ持っていると思います。では、どのようにして区別するのでしょうか。割合が6対4なら善人とでも言うのでしょうか。分けること自体が無意味なののでしょうか。

ここまで来て、倫理学の授業を受けているように答えの出ない問いが次々と頭に浮かぶのが新鮮でした。例えばこんなふうです。

1. 騙す方が悪いのか、騙される方が悪いのか？
『奇跡の咀』では、脇役の母娘は最後まで疑うことをしない。
2. 何の為に喜捨、寄進するのか？
自分こそが救われたいという究極の「自分ファースト」なのか？
3. 宗教であれば騙す、騙される関係は許されるか？
極楽（天国）へ行ける、は嘘か。信じた人がそれでよいと思えばそれでよいのか。
4. ひたすら信じていたのに報われなかったら、自分が悪いのか？
それとも宗教者がよく言うように神（仏）があらたな試練を与えたと考えるのか。
報われることを期待して信じるのか。
5. 信じるものがない人は不幸か？
精神的な拠り所がないと心は不安定になるか。
6. 逆に、信じるものがある人は幸せか？
単に騙されているだけではないのか。
それでも自分が騙されていると分からなければいいのか、幸せなのか。
騙されていたと判ったらどうなるか。
7. 他人はどこまで信じられるか？
自分が安心や癒しを与えられていると感じることができれば良しとするのか。
最後の最後になって、自分に頼る人（又はもの）があれば良しとするのか。

最後に二人の主人公に話を戻します。

他人の弱さや信仰心を利用して騙し、受け取った金銭や財宝を自分たちのためだけに使って贅沢な暮らしをしていました。それ故に神に懲らしめられるかの如く、自分たちの嘘や背信行為が白日の下にさらされそうになるところで話は終わります。

二人が活着ているうちに尊像が帰ってきたので問題になりそうですが、二人の死後に帰って来たらそれまでは立派な人物だと巷間伝えられたのではないのでしょうか。死後にバレても二人にとっては痛くも痒くもありません。人の毀誉褒貶はほんのちょっとしたきっかけで変わりますから、まるでオセロゲームのようです。

そして最後に、なぜ有島は二人の主人公を悪人として、しかも2作目はより悪人らしく描きたかったのでしょうか？という初めの問いです。悪人らしさをパワーアップして書くことで如何にも道徳的な話を書いているように見せながら、実は誰にも善人の顔と悪人の顔を併せ持っていることを言いたかったのでしょうか。姦通罪で捕らえられた女性をめぐって、イエスが「あなたたちの中で罪を犯したことのない者が、まず石を投げなさい」と言ったことを思い起こさせます。主人公だけでなく、町民も何かしら責めを負うべきだと言いたい気持ちがあったように思います。

1 紛らわしい漢字

言い訳というか愚痴を書くことから始めたい。

はじめ、戯曲のタイトルを『奇跡の呪』と書いて、何を呪いというのだろうと悩んだ。しかし、ある日、全集本の左上にタイトル名が『奇跡の呪』となっていることに気が付いた。慌てて、「呪」を漢和辞典で調べたら、「読み=ソ、意味=かむ・かんで味わう」とあって、「呪」とは別の意味であることを発見して狼狽した。しかし、「奇跡の呪」とは何のことか迷わなくてよいことになったので安心もした。「奇跡」についてわかりやすく説明することというのが題名の意味だとすれば、どのような奇跡が起こったのかを考えればよいからである。

ところがつい一週間前、本文を読み直していたら「呪」の脇に「のろい」とルビがついているのではないかと。再び愕然とした。有島は「呪」の意味で「呪」を用いているのだ。書き始めた下書きを一からやり直さなければならない。その晩はよく眠れなかった。

漢字の使い方に注意が必要だ。二つ例を挙げる。本文では「跋足」と書いて「びっこ、ちんば」とルビがついている。しかし、「びっこ」を調べると「跋」の字が出てくる。「跋」は「読み=バツ、意味=書物の本文の跡にある文章。踏みつける。かかと」と説明があって、足の不自由なさまを言う語ではない。だから有島はここでも辞典にはない使い方をしている。

もう一つ、191頁の初めの方に「あらぬ噂を嘔われた」という表現があって、この「嘔」は辞典には五つほど意味が書いてあるが、中では「歌う」というのがよさそうだ。そして歌うには「謳」と同じだとしてある。漢籍の素読で鍛えられたと自負するだけあって、語彙がとても豊かなことがわかるが、この「ごんべん」と「くちへん」の入れ替えが「呪」と「詛」の間でも行われているのかもしれない。この入れ替えができるなら、有島の用法は「呪い」の意味で正しいので、私が「判りやすく説明する」意味と解釈したのは誤りである。そして書きかけの下書きは全面的に改めなければならない。困った。

書き改めはうまくいかなかった。ショックが二度もやってきて対応しきれなかったのだ。それで「判りやすく説明する」「奇跡とは何か」のラインで考えていたことをベースにして、修正できるところまで修正したのが本論である。かなりへんてこりんな内容になっている。寛恕を乞う次第だ。

2 紛らわしい題名

『奇跡の呪』という題を前にして悩んだ事情を少し書いておきたい。この題名には違和感を持つからである。

『大辞泉』は「奇跡」を「キリスト教など、宗教で、神の超自然的な働きによって起こる不思議な現象」と説明している。また「詛」は動詞の形で「恨みや憎しみを抱いている人に災いが起こるように神仏に祈る。また、災難が降りかかったり失敗したりするように願う」と説明している。

そこで、「奇跡」と「詛」の語義をつないでみると『『神の超自然的な働きによって起こる不思議な現象』『の』『恨みや憎しみを抱いている人に災いが起こるように神仏に祈る』こと』となるのだが、戯曲の題名として意味が不明である。「奇跡」は神の働きで「詛」は人の願いだから、整理して「神の働き『の』人の願い」とは何のことだ？と首をかしげざるを得ない。

「の」について調べた。「の」は格助詞で、おおきく四つの用法があり、一つは主格を示す(例、花の咲くころ)。二つ目は連体修飾格を示す用法で、さらに細かく十四の意味に下位分類されており、第一に「所有を表す。…のものである。例、会社の寮」という意味が示してある。(残り十三の説明は省略)。三つ目は同格表す(例、ジュースの冷えたのが欲しい)。四つ目は「ようだ」などの上につきその内容を表す(例、綿のような雲)。『奇跡の詛』の「の」は「同格」を表す用法だと解釈したい。「 α の β 」なら「 α であって β である」という意味だ。上に挙げた例なら「ジュースであって冷えたジュース」という使い方だ。

これを『奇跡の詛』という題名に当てはめると「神の働きであって人の願い」となるが、まだ釈然としない。もし「人の」ではなく「神の」であればサマになる。「神が自らの超自然の力を発揮する(話)であって同時に神が人に災いをもたらそうと呪う(話)」という意味になって腑に落ちる。確かに神は人を祝福するだけではなく、人を呪うこともあるのだった。『創世記』のノアの箱舟、『出エジプト記』のユダヤ人の放浪、『黙示録』の硫黄の雨の話などいずれも神が人を呪う話だ。

結局『奇跡の詛』という題名の意味は「神のもたらす超自然の出来事であって、同時に神が人を呪う出来事」ということに落ち着く。では戯曲にはどんな出来事が描かれ、そのどこが神のもたらす不思議な出来事であって神が人に災いが及ぶように呪った出来事であるのか。一つの出来事が両方の意味を同時に持つというのだから興味をひかないわけがない。一方が神でなければなし得ないいわば祝福であり、同時にそれが神の怒りの表れでもある呪いだなどということがありうるのか。戯曲の中のどんな出来事がそれに該当するのか。とても難しい読みを強いられる。

という訳でずいぶんと悩んでいたときに、「咀」はわかりやすく説明することだという助け舟が表れた。こうして話は1の漢字の話に戻る。

3 『片輪者』と『蜘蛛の糸』

芥川龍之介の『蜘蛛の糸』は短い童話である。1918年(T7)5月号の『赤い鳥』に発表された。釈迦が極楽の蓮池から降ろしてくれた蜘蛛の糸にすがって、稀有の悪人ケンダタが地獄から脱出しようとしたところ、血の池地獄で苦しんでいた他の罪びとたちが同じ蜘蛛の糸にすがって我先にと地獄から這い上がろうとしていることに気が付いたケンダタがこの蜘蛛の糸は俺のものだからお前たちは地獄へ戻れと叫んだ途端に糸が切れてケンダタもまた地獄に転落してしまう。

善因善果、悪因悪果という図式が明快な勧善懲悪の「童話」であるが、人間の心理のひだも織り込んだ仏教臭くなく近代的匂いのする話である。善悪を釈迦が一でも見ていて正しく判断するものだと、絶対的な正義を語っているようである。

これに対して有島の『片輪者』は『奇跡の咀』を数年後に改作したものだ。執筆の狙いが童話仕立てにあるので、構成は単純化されており、人を騙す嘘をつい金儲けをしても最後はばれて罰せら

れるのだという一つのメッセージが込められているだけで深みが消えている。これも勧善懲悪といえはいえるが、聖像が町に戻って初めてウソがばれるところや、逆に聖像が不在の間は悪がまかり通るところから、ばれない嘘は悪くはない行いだと屁理屈を言うひねくれた子供も現れそうである。聖像が『蜘蛛の糸』の釈迦のような絶対者として設定されておらず、共同体の守護者として町の住人に招かれた存在であるためだ。ここは二つの作品の違いだと言えるだろう。

釈迦のような絶対的な超越者を設定すれば、容易に明快な筋立てで悪を懲らしめる「童話」が描けるだろうに、そのような設定ができないところに実は有島の苦悩があったのだと推測する。神の絶対性が揺らいでいる点は『奇跡の咀』を不幸にも引き継いでいるのである。

作品発表が、創作エネルギーを失っていた時期のもので、新しいものが用意できず、やむを得ず改作して依頼に間に合わせたのだと思われる。要領よくまとまっている風に見えて、実は痛々しい作品だと思う。

1 初めに

「咀」と「詛」が別の字であることに気が付かず、「咀」を呪いの意味で理解したため、奇妙な題名だと思ってずいぶん悩んだ。「咀」は「かむ・かみ砕く」意味でそこから「難しい内容をやさしい言葉を使って分かりやすくする」という意味も生まれる。それで、題名についての悩みも解消したが、私の毫碌もずいぶん進行しているのだと、自戒することしきりである。

題名は、「神の超自然的な働きによって起こる不思議な現象をやさしい言葉でわかりやすく説いたもの」という意味だ。では、神の力がもたらす不思議な出来事とは何だろう。

戯曲の舞台はトゥロン(Toulon)で、聖像マルチンをバイキングの襲来から守るため山中深く隠したことに取材した話なので、時代は8世紀から11世紀にかけてである。聖像マルチンの奇跡譚が伝承されるのはローマカトリック教会が繁栄しているからだ。そして、この時代にはたぶん多くの宗教上の習慣が形成されており、その約束事の中で人々は敬虔な信者として暮らしていたのだろう。聖像の意味や役割についての共通理解、盲人や跛足達に市民として接する際の習慣なども既に約束事の中に含まれていたはずだ。それらがどのようなものか私は詳しく知らない。しかし、神の奇跡をいわば絵解きしたこの戯曲が戯曲として成り立つためには舞台となっている中世基督教社会の様々な常識、掟、約束事を前提としなければならないと思われる。

有島は戯曲の大前提としてこのことを踏まえてえり、そのうえでの創作だと思う。しかし、この作品は神の奇跡のわかりやすい説明と自称する割には曖昧さがあり、同時に物語に矛盾した要素を持ち込むことになった。その結果基督教会共同体の歪みをも露呈する結果になっているのではないだろうか。戯曲中で起こる現象の何が奇跡であるのか、実は私にはわかりにくかった。私に理解させにくくしたものが「歪み」であったと確かに取り出せるかどうか自信がない。もしかしたら有島自身も創作しつつ歪みを意識していたかもしれないとも思うのである。今回、私の関心はこの「歪み」を考えることにある。

ただし、基督教信仰とは縁のない私が、基督教について云々するわけなので、信者から見ると偏見に満ちた議論だと思われる点が多いことだろうが、この際それもやむを得ないと覚悟して進める。

また、『片輪者』については、芥川の『蜘蛛の糸』との簡単な比較をしてみたい。

なお、今日では差別用語として使用しない約束になっている言葉が、戯曲の中にはごく普通に用いられている。言葉は時代の制約を超えられないものと言われる。1910年代という時代では差別用語という認識が希薄だったためなので、使用自体をとがめだてしても意味がない。また作品中の用語をいちいち現代風に言い換えるのも現代的な処理かもしれないけれど、逆に作品の世界を壊すことにもなると思うので、作品を論じる限りにおいて、用語はそのまま使うことにしたい。念のために断っておきたい。

2 構成の巧みさ

戯曲は巧みな構成をとっていて、そのため、読者には喜劇のようにも感じられ、もし二代目桂枝雀が高座で演じたら爆笑間違いなしの噺になるだろう。落語なら人物を一人で演じ分けるのだが、戯曲では母親甲とその娘乙、盲人 A と跛足 B の四人が登場する。四人が同じ場面で会話をする事がないように構成されている。基本の対話は二人一組であるが、始めの甲と A の対話内で A と B がお互いに相手を嫌悪していることが語られるのに対して、最後の A と B の対話で実は二人がつるんでいたことが明かされる。ここが構成上のミソで作者の工夫である。不仲の二人がひそかに共謀していると知らない甲と乙とに従って観客も最後まで騙され続ける。四人の会話場面が長々続けばトリック隠しはできない。対話を通して話題が提起され、話題がリレーされるに従って次第に奇跡の全貌が明るみに出てくる。緊張感をはらみつづつどのような「事件」が起こるか観客をはらはらさせる。巧みな構成である。

3 A の卑下

甲や乙と会話をする A と B の二人は恭しい以上に自己卑下に満ちた語り方をし、甲や乙は卑下する彼らを敬意のある丁寧な言葉づかいで遇する。この敬意は所謂リスペクト(価値を認めて心服すること)とは異なっているように見える。どこかよそよそしく、敬して遠ざける意識が隠れているようだ。さて、A は甲との対話の中で自分が盲目であることを 次のように説明する。

自分は「神の呪いを受けた身」なので「生まれたときから」盲目なのだが、神の「呪いを呪いで返すようなことは」しないだけでなく、むしろ「肉に下った神の咀いは結句私の霊には祝福なの」です。(187 頁冒頭～188 頁にかけて)

A は神の呪いによって先天的な盲目として生まれた。「恨みや憎しみを抱いている人に災いが起こるように祈ること」という呪いの原義からみて神が A に何らかの憎しみを抱いており、神自身の「祈り」が実現して盲目という災いが A にもたらされたと理解できる。しかし、呪いの原因が何かについては語られていない。健常者には見えない人の心を見る力を授かったので A は自分の「霊には祝福だ」と受け入れる。神の不条理を人が許すような傲慢ささえ感じる。勿論この言葉は A が既にこの町で一廉の人物という評判を獲得していることに加えて、熱心な信仰者として甲の信頼を得たいという意図からも出ている。それにしてもなぜこのような謙遜に満ちた口ぶりで自らを語る必要があるのか、またなぜ盲目に生まれたことを神と関係づけて説明しなければならないのか。

このような疑問は戯曲を読む本通りから外れるだろう。多分、私の個人的な関心の脇道に逸れて行く。

四十五歳の A は物心がついて以来、だれと話すときも甲に対するのと同じ口ぶりで話し続けてきたはずだ。この話し方つまり絶えず卑下し続ける姿勢が町の住人と人間関係を形成し居場所を得る方法だった。自らを卑屈に貶めなければ町の住人として受け入れられない。なぜなら、神に呪われた存在という自己認識(規定)は同時にトウロンの町の人々が A を見るときの見方と表裏の関係にあ

るからだ。A自身が神と自己との関係を、町の人々のようには神に愛されず誕生を喜ばれなかった哀れな関係だと語り、そのような存在の自分をだからこそ受け入れてほしいと町の人々に願う必要があり、その願いを伝えるのが謙遜に満ちた言葉遣いだ。物語の背景的条件としてトウロンの宗教的な約束や習慣や町の掟の存在を想定しておいたが、その習慣や掟がAに卑下の姿勢を要求するのである。しかし、Aに卑屈な態度を要求する掟があったことについては、戯曲中から抽出することができない。中世の基督教的な社会なら持っていたはずだという私の「想定」に基づく。

このことは一般論として言えば、共同体から疎外された人間が共同体のどこかに居場所を求めるときに取らざるを得ない姿勢であり、共同体成員との関係性の作り方であった。すると、不具者と町の住人と基督教会の三者がそれぞれに依存しつつ淫靡に背馳する危険な関係が浮かび上がってくるのではないだろうか。

有島が「一般論」を理解していたかどうかは別にして、「肉への呪い霊への祝福」という catch copy が不具者が差別されながら共同体の片隅で生きる際に用いる戦略だという理解はして、だからこそ戯曲の中でもそのような言葉で振舞わせているのだ。しかし、そのように振舞わせることつまり中世の基督教社会の作法(私の「想定」の下での議論だ)をそのまま利用して戯曲を創作するとき、有島の中でも未解決のまま棚上げされている基督教と教会と自分との関係の問題が露呈してくるのではないか。有島は二人の片輪者の生き方に自分自身のことを重ねてみていたかもしれない。Bと乙との対話を通して考えてみたい。

4 Bの卑下

Bが跋足であることを説明している箇所をそのまま引用する。

「私はそういう風に物をいわれるだけの罪人です。どうか私を思う存分辱めて下さいまし。それだけ私の罪が減びるでも御座いましょう。世の中の人達は私のした位のあやまちは気にさえる程のものではないと仰有るかも知れませんが、私にはどうしてもそうは思えません。神様が私を跋足になさったのも全くその為です。よく生きながら地獄に落ちなかったもので御座います。どうか御慈悲に私を鞭ってください。鞭の一打ちはそれだけで私の罪を軽くするかも知れませんから。」

「お母さんBさんの犯したと仰有る罪は私が考えてもささやかなものなのよ。妹御をたぶらかそうとした男を斬り殺しなされたのですって。」(194頁)

引用冒頭の短い三つのセンテンスをかみ砕くと次のようになる。「私は人から不人情な言葉遣いをされるのもやむをえない罪びとです。だからどうぞ満足行くまで恥かしい目に遭わせてください。恥かしい目に合った程度に釣り合うだけ私の罪が償われていくことでしょう」。もっとあからさまに「罪びとは罵られて当然」「市民には好きなだけ恥辱を与える資格がある」「罪びとが恥辱に塗れる程度に応じて罪障が薄らぐ」「だから辱め、時に排斥することは罪びとへの恩恵であり、ひいては神の心に叶うことだ」と言えば言い過ぎだろうか。Bは乙(と乙の属する社会)の手前卑屈になら

ざるを得ない。つまり、Bの言葉が基督教共同体の中で発せられ、それを聞く共同体成員とBとの間に黙契があることを前提にする限り、罪を悔いる切実な言葉はこのような厳しき、酷薄さに出会うことを承知で発語されていると見るべきだ。黙契は基督教教会のもとで神に支持された神の名による共同体成員の契約である。黙契は神を仲立ちとして支配・被支配あるいは差別・非差別を均衡させ成員間の関係を固定させている。Bはこの固定された関係を前提として行動し、語る以外にこの共同体に所属し続ける方法がない。第四の文以下からも今述べてきたことが確かめられる。

さて、先に、不具者と町の住人と基督教教会の三者がそれぞれに依存しつつ淫靡に背馳する危険な関係が浮かび上がってくると予想した。Bと乙の間でどのように表れているだろうか。

Bは乙に対して低姿勢で恭順を誓っている。健常であることは神からとがめられていないことだという言い方によって健常者の優位性を保証している。そして罪びととして許しを請うのだが、それは乙に対してだけではなく、乙の属する基督教共同体の成員に対してであり、このことはひいては神に対して許しを請うことでもある。

乙の方はどうか。Bに対して優位にある者として寛容に振舞い、恩恵を与える。共同体への参入を許す。それがこの共同体の成員に求められる善の実践であり、ひいては神への忠誠の証の意味を持ち、従って神の加護を得ることだからだ。Bが存在しなければ乙の神への愛は証明できない。Bと乙は共同体の中で相互に依存して存在する関係にある。

基督教教会共同体はどうか。片輪者と健常者の対立が含みとして存在するからその対立の仲裁者として掟とともに存在しようとする。Bと乙とを共に神と教会に従うものとして遇する。教会の掟の中で、教会を中心としたBと乙を含む三者の関係が確認され維持される。

健常者が片輪者を排斥すれば三者の関係は成立しない。排除すれば健常者は神を愛さないものとなるので彼は拒否できない。片輪者が神にのみ許しを乞うなら共同体への参加は保証されないし、共同体に背を向けても三者の関係は成立しない。両者とも神の仲介を俟つことによって、つまり三者が揃って初めて関係が成立し、基督教教会共同体として維持される。これが相互に依存しあうということである。発生の原初でどのようなであったかを論じることはここではできないが、基督教教会共同体として一応の形成がなされた後では、共同幻想として共同体の習慣・掟は人々に受け入れられ、特にその都度意識するまでもなく、習慣的に物事が進行していく。聖人譚はこの三者の相互依存関係をもとにしなければ語れない構造を持っている。

ここでは既に掟が黙契として存在していることを前提として議論してみた。しかし、この円滑に見える共同体の維持、習慣の維持が、戯曲の中で淫靡に背馳しているようにも見える。それはどういうことか。中世社会という基督教中心の共同体の習慣とその運用がこの戯曲の物語空間を支配している規則と同期していると思えば、その点について論証抜きで議論してきたのだが、今の場合それで十分だと断っておきたい。作者が人物たちに語らせる言葉はこの中世的な習慣を前提にした時に初めて意味を持ち、観客からの同意を得ることができるよう語られているからである。

背馳しているというのは片輪者の二人が共同体に挑戦しており、戦略的な掟破りをしているからである。そこには共同体が崩壊する景気が隠れている。

5 A と B の戦略

戯曲の終わり近く、A が乙から、B が甲から聖像マルチンが町に帰還すると聞かされ、A と B が二人で「百年目だ」と覚悟する場面がある。この場面で初めて A と B とが初めからのグルであったことが明かされる。A も B も甲と乙の親娘だけでなくこの町の成員全体をも騙していたことが二人の慌てた口ぶりで解き明かされる。

A が「私の肉に下った神の咀は結句私の霊には祝福なのです」と語り、B が「神様が私を蹴足になさったのも全くその(あやまちの)為です」と語るとき、二人とも心底からそのように信じて語っていたわけではなく、そのような言説を用いるほうが受け入れられると計算して信仰の篤さを装っていただけだとわかる。基督教共同体の掟はもたれあいの構造によって成り立っていることを知っていてそれを逆用したのであり、彼らの言説は極めて戦略的にもものだった。逆用ができるということは(母娘も喜捨をする住人も、AB と社会構造の上で連んでいることを意味する)。

しかし、この二人の戦略的な行動を母娘は非難するだろう。町の住人達は怒り狂うだろう。二人が「百年目だ」と語りつつ逃げだすとき、この二人はため込んだ財産を没収され命まで奪われる危険を感じている。だが神あるいは帰還する聖像マルチンはどうだろう。

二人による詐欺行為がそうと気づかれずに彼らの戦略通りにまかり通るところ、そのような物語を創作できるところに基督教会を中心にした社会自体が危うさに満ちていることを証しているのではないか。相互依存によって成り立つ共同体は一方でその社会が自壊していく要素を内在させているのだと母娘はやがて気づくのではないか。聖像マルチンは二人をどのようにもできないのではないかと思うのである。信仰の共同体の危うさが二人の戦略的な冒涇を通して隠微な背馳という姿を取って示されている。信仰の共同体が陥る危機がここにはあるのだけれど、物語の中でこの危機を克服すること breakthrough ができず、循環的な構造の中で堂々巡りをする。しかし二人は罰を畏れる戦略的な反逆者でありながら共同体の住人でもある二重性を背負わされているからだ。

この戯曲を書きつつ、有島自身がそのことを感じていたに違いないと私は考える。ここで詳しく論じることはできないけれど、有島が教会を離れた理由の中に、彼自身が詳しく語っていないとしても、上に指摘したような神の共同体の欺瞞性への疑いという事情が確実に絡んでいるだろうと考えるのである。

6 詳しく説明された奇跡とは何か

眼が見えたり歩けるようになることが奇跡だと単純に考えることはできない。

そもそも A が盲人として生まれたのは、A によれば神の怒りに触れた結果(理由は不明)だったが(A は信じていないが人の耳に快いようにそう説明しただけだとも言える)、神の怒りが解けたから目が見えるようになったのだろうか。だとしたら怒りが静まった理由を知りたいがそれは示されていない。また、彼がトゥロンの人々に行った行為は罰せられはしても許されるはずもないから、聖像マルチンの力で目が見えるようになったのは人を騙したからだという解釈も人を納得させない。一方 A は聖像が帰還すると知って目が見えるようになると恐れ、畏れた通りになる。彼は己の詐欺行為の報いは目が見えるようになることだと理解している。盲目で生まれる際に背負っていた神の怒

りという根本原因の方は忘れられている。神が行ったことと聖像マルチンが行うことは別のことだとも考えられるが、神の意志に反することを聖像マルチンが行うのだとも、教義に不案内な私には考えにくい。Aの眼が見えるようになることが神または聖像による奇跡なのだとしたら、奇跡には必然性がなく単なる気まぐれとしか言いようがない。「奇跡」は「神の力による不思議な現象」と定義されるが、Aの悪に対する報いとして開眼が行われるのだとしたら「咀」の「詳しい説明」だとは思えないのである。

Bが跋足になった理由は殺人という「あやまち」のためだったとされていた。乙がBの過ちはやむを得なかったのだと弁護しているが、これもBの詐話を真に受けての弁護かもしれない。Bの「あやまち」話が本当であったとしても、あやまちを犯したBがある朝目が覚めてみたら足が不自由になっていた(そうは書いていないが、後天的という意味で)という設定はご都合主義だ。その点はまあ良いとして、Bにやってくる奇跡とはどのようなものか。

Bは「あやまち」を悔い改めるために、聖像マルチンのいる山に人々が奉納する財宝を届けることを請け負い、難行を実践すると言って財宝を預かる。しかし実際はそれらを自分の懐に収めるといふ悪を犯していた。その彼の足萎えが治って自由に歩けるようになる。神の奇跡というのは、「あやまち」への罰であったはずの跋足を許すことと同時に人々への詐欺行為も許すこと、即ち自由に歩けるようにすることなのだろうか。矛盾する二つのことを同時に行う神または聖像マルチンの摂理に誰が共感するだろう。Aの場合と同じく気まぐれが神の奇跡の現れ方だということのならそれなら理解できるが。

こうして、始めの方で「神の力がもたらす不思議な出来事とは何か」「神の奇跡をどのようにわかりやすく説明しているか」という問いを立てたが、「何か」についても「どのように」についても戯曲の展開のうえでわかりやすく説明していないというのが結論になる。説明できない。

7 「呪いと祝福」という副題

『奇跡の咀』の意味を「神の力による不思議な出来事であるとともに神が人の不幸を願う出来事」と解釈すると、一つの出来事がよいことであると同時に悪いことでもあるという背反する出来事をどのように戯曲が語っているのかを読み解きなさいと言うとても難しい課題に直面することになった。このことは要約版の言い訳の中で取り上げておいた。副題はこの背反する意味を持つ出来事を端的に表す言葉だ。そして、Aが語る「肉に下った神の咀は結句私の霊には祝福なのです」が答えを示している。Aの眼が見えるようになることが同時にAが基督教会共同体から追放されることである、というのがそれである。Aにとって前者は祝福であり、後者は呪いである。Aの言葉は、盲目に生まれついたことが呪いであり、人の心を見抜く力が備わって神に仕えることができるつまり共同体に意味のある存在として参加できるというのが祝福だった。物語の最初と最後で、肉と霊に与えられる意味が見事に逆転している。一人の人物の一つの出来事が相反する意味を同時に持つという問題として考えたときの答えとしては成り立つ話だろう。

人への奇跡が同時に神への呪いでもあるような「呪いと祝福」はあり得ないだろうか。

Aに対して、目が見えるようになる現象も共同体から追放するような現象も共に神の力によって

生じさせた不思議な現象であり、同時にその奇跡を生むことが神自身が神の掟に・共同体の掟に背くことでもある、という背反する出来事の出来であるという解釈はできないだろうか。神が自らに唾するようなあり得ない話なのだけれど。しかし、「6 奇跡とは何か」で奇跡について統合的な説明ができないことを確かめたので、説明できないことを生じさせてしまう事態のことを「呪いと祝福」と捉える余地もありそうに思う。もしこのような乱暴なことにつながる余地があるとしたら、それは、基督教会共同体が持つ壁、自らが壊れていく裂け目を示しているかもしれないとも思うのである。

ここで、私の感想は戯曲の世界を離れてしまう。有島が中世基督教共同体を舞台に「奇跡譚」を構想したとき、悪人二人に訪れる奇跡が私があげつらったような複雑さに見舞われる事態をもしかしたら予感していたかもしれないと思うのである。それは物語空間が基督教会共同体の神とひとびととが作る默契の上で成り立つことを知っていたからだ。その默契は相互依存つまり人々の善意や悪意や神の掟の循環によって維持されるために、善意が悪意を呼び出し、悪意が神の掟を呼び出すという相互作用が無限に循環する構造になっている。物語の中に異質な矛盾が生じたときにそこから抜け出すことができない、物語空間の置かれている地平を breakthrough できないことを物語中の問題解決を迫られる次元で実作者として感じ取っていたはずだと思えるのである。

このことは、基督教会から有島が離れていく原因の一つとしてどこかにわだかまっているのではないかと私は予想するのである。有島の中でも未解決のまま棚上げされている基督教と教会と自分との関係の問題が露呈してくるのではないか。

「奇跡の咀」「片輪者」読後感

Tak.

現代では使用できない差別語満載の作品である。こどもの頃は日常的に周りで使っていた言葉だが、いまこの作品を読むと最初にそのことがひっかかってしまった。

単純に言うと「嘘は必ずばれる」という話であるが、なぜ有島がこのシチュエーションでこんな話を書いたのか。一つの物語を二つのスタイル（戯曲と短編小説）で書いたことにどんな意味があるのか。その時代、社会の雰囲気に関心を寄せたくなる作品だ。

障がい者には先天的な方もいるが、子どものときに目にした傷痍軍人と言われた人の姿が強く焼き付いている。有島が渡米する時期に日露戦争がおきた。

「日本においても日露戦争後に大量の傷痍軍人が出現して大きな社会問題となり、国家により救済支援制度が整備された。また、第二次世界大戦において多くの軍人が戦死、あるいは傷痍軍人となった。戦時下においては、戦傷もまた名誉とされ、在世中の軍人傷病記章を着けることを許され、社会的に優遇を受けることもあった。」「日本でも戦争でケガをした人は傷痍軍人として大切にされ、故郷では軍神様とも崇められていた。」しかし、民間では福祉という言葉すら存在せず、ほったらかしであった。1949年になって、アメリカのヘレンケラー女史の来日が後押しとなり、やっと身体障害者福祉法が制定されることになる。」（出典：ウィキペディア）

有島は、傷痍軍人たちが「優遇され」「崇められて」いた姿をどこかで見ていたのであろうか。障害者の家族たち、知人たちは彼らへの何となしの遠慮や同情を示す接し方をし、それが当人たちへの「特権」意識を醸成しないとは限らない。子ども時代、風邪で熱を出したときに家族が急に優しくなったりするついで甘えた態度になってしまった記憶がある。

AとBが手を組んで、詐欺的行為に長けて、相手の善意に付け込んで行くさまが会話から見えてくる。まるで現代の「オレオレ詐欺」（今は劇場型でもっと手が込んでいるが…）の手法だ。日常的にも「今日の運勢」「私は〇〇座」など軽い占いがあるが、せっぱつまって占いに頼る場合もあるであろう。「あそこの宝くじ売り場で買うと良く当たる」などは本当に人の行動に影響を与えている。

「明治30年代半ば（1900年）頃の日本では、催眠術ブームが起こり、清原や千鶴子のような民間療法を行なう民間医が多数存在した。最初に千鶴子を取り上げたのは、明治42年8月14日付の『東京朝日新聞』である。「不思議なる透視法」として、千鶴子が、京都帝国大学の前総長であった木下広次の治療を行なったことを報じている。…明治43年（1910年）2月19日、熊本を訪れた今村が、カードを用いた透視実験を行い、高い的中率を得た。同年4月9日には、福来友吉と今村の二人で熊本を訪れ、より嚴重に封印されたカードを用いて実験が行なわれたが、この時は失敗した。」（webから引用）

有島がこうした「事件」に関心を持ったかは分からない。1918年第一次世界大戦の終盤に起きたインフルエンザ（スペイン風邪）の世界的なパンデミックを体験した彼がCOVID-19パンデミック

下の日本の状況をどう作品にするだろうか。

以上

もし、詛にかかる二人が目や足が不自由なく生まれていたら。出しゃばりな性格ではなかっただろうか。生きる力が強いこの二人の、面白い生活はなかっただろうか。

きっと、アイデア豊かな二人は、インチキな健康器具や玉を売っていたのではないか。ロイド＝アレグザンダーの「ウェストマーク戦記」に正義のために立ち上がる二人のイカサマ師が出てくる。イカサマ師の称号があっても、詛の二人が立ち上がらない確率は80%かもしれない。

1990年代の後半から、知らないうちに様々な作品が消え、別の作品名になって出版されていった。美味しそうに白いコンクジュース的なものを飲むキャラクター（私はコオロギだと10年前まで信じていました）、おやつの前に読んでは気分を盛り上げた、美味しそうなトラのバターが入ったパンケーキが出てくるお話、いつか素敵な南国を旅して一緒に踊りたいと夢見ていたポ○ゴ豆のエキゾチックなCM、眠る前に欠かせない冒険物のマーク・トウェインの「王子とこ○き」等々の私個人の人生の思い出が否定されていく。

今回の読書感想文の作品名も、「引用上不適切な表現がありますが、作者の意図を尊重してそのまま配布します」というところだろうか。私も、思うままを書き連ねてみる。しかし、そんなことを引用する私が間違いなのか。受け手がそうと思えばそうになってしまうのであれば、ややこしいことに巻き込まれるのは回避するため、理性を装い文章に起こさないのが賢明だろうか。隠してしまっただけで表現するといやらしい表現になり、尚更、差別感満載の影が付きまとう。思い出すのは「三人めくら」昭和45年3月25日小学館発行、『カラー版名作全集少年少女世界の文学第12巻・フランス編1』というフランス民話。同時期に小学館から発行されたヘレン＝ケラーの伝記とは違い、差別用語のオンパレードで大人からの解説が必要であった。登場人物の紹介をします。これから一緒に旅に出ようと思立った三人は、生まれた時から神経の不具合を持ち合わせていて、あるいは猩紅熱や怪我が原因で中途失明かで目がかなり不自由で見えない境遇だった。お天道様の巡り合わせが悪いのか、何かの理由で仕事や財産を持ち合わせていないため、現状としては生活していく天下の周り物であるお金を今は持ち合わせていなくて、当時はきちんとした福祉社会になく、いやもしかしたら福祉を受ける権利を知らないため……。たった2、3行で語れることが、言葉狩りに合わないよう一生懸命に言葉を探すと、辛辣そして滑稽な表現になっていく。

[日本](#)において乞食行為は、[日本国憲法第27条](#)のもと、[軽犯罪法](#)や[児童福祉法](#)で禁止されているというが、言葉“乞食”はそんなに悪い言葉だろうか。言葉“乞食”には歴史や文化や風土を知る力がある。

札幌の地下街の連絡通路に、通路の商店が連名で「この通路での托鉢行為はご遠慮願います」という掲示がある。10年くらい前からそんな表示がされたのではないか。托鉢行為は乞食行為であるという観点なのだろうか。本来は、仏教用語の乞食 Kotsujiki で修業であるはずだが。托鉢僧を装ったインチキ師が紛れ込んだので、誤解が起きないように排除したのか。確かに、少し托鉢僧の様相

に不気味な感じを受けるかもしれない。子供の時に留守番をしていると、玄関フードの開く音がして、そっとドアの覗き穴から見ると唐傘をかぶった時代劇に出てくるような僧がいた。チャイムも押さずに、玄関前で念仏のようなものを唱えながら、おりんを鳴らしていた。しばらくすると丁寧にお辞儀をして行ってしまった。行き先を確かめるため、家の窓からこっそり覗くと、今度は隣の家の玄関前で同じようなことをしていた。頼りの飼い犬は雪が深く小屋に入ったまま出てこなかった。怖くて心臓がドキドキし、母が帰ってくるやいなや、そのことを機関銃のように話したら、それは、「ゲ〇〇の鬼太郎の妖怪でも時代劇の刀を隠している虚無僧ではありません。Takahatsu という修行をしているお坊さんで、人々が幸せになるようにお祈りしてくれたのだから、得（徳ではなく）をしたと思いなさい。」と大騒ぎを制された。いつも施しをお椀に入れずに人に向かって押込んでくれている地下街の托鉢僧も、その様なことで本来の行為の意味を理解してもらえないまま排除されたとしたら不憫だ。タイやカンボジアのように風習に溶け込めなかったとしても、共同募金以下の扱いである。

そもそも平凡人（有島武郎「平凡人の手紙」引用）は、言葉の語源まで考えて話したり書いたりしない。教育に責任転嫁するようで申し訳ないが、その言葉は禁止用語ですという教育をしているのだろうか。そんなのは、そう考えるほうが差別だろうと思ってしまう。

確かに名前には意味がある。分類するためには必要でもある。

“ハチ”と言っても、色々な種類がいる。

“セイヨウオオマルハナバチ”は、セイヨウ（東洋や和のものと分けて西洋の）-オオ（大きな）-マル（ずんぐりむっくりな太って短いさま）-ハナバチ（花に寄ってくる蜂）だとする。

「西洋の」は人類を二分している差別感や不平等感、侵略的なイメージがある。和という言葉も和人を連想させ、どこかしっくりこない。

「大きな」は、小さいものにとってコンプレックスを呼び覚ます。

「丸」ずんぐりむっくりと呼ばれてうれしい人はいない。「丸ちゃん」などと、愛犬を呼んでいる人は寛大で心優しいと感じる。

「花によってくる蜂」、……、花は女性の象徴で、「幸せ」「愛情」「美」「喜び」を意味するラッキーモチーフと書いてあるものもある。女性とか男性とか差別を感じ、逆を考えると男性の象徴は「石」か不幸象徴となるもので、不平等極まりない。

「セイヨウマルハナバチが一杯いるね！」と言ったが最後、「デリカシーのない差別主義者！」そんなことを相手に感じさせてしまうとしたら、恐ろしくて、昆虫の名前をうかうか言葉にすることも難しい。「あっ！ハチ。」と無味乾燥な一言が誤解をよばないのでよろしい。

ある草が生えていたとする。「これは、“ママコノシリヌグイ”です。」と言ったら、「まあ、なんてお下劣で非道徳も甚だしい。」と非凡人（引用略）に叱られそうだ。

名前の由来は、この草の**棘**だらけの茎や葉から、憎い**継子**の尻をこの草で拭くという想像から来ているという。**韓国**では「嫁の尻拭き草」と呼ばれるらしい。今の時代、“嫁”と呼ばれて喜ぶ人は少ない、かちっと来る人のほうが多いのではないか。自ら名乗る人も減った。

差別用語と騒ぎ立てる人に物申したい。あなたが神経をすり減らすほど気に留めているのは、軽蔑

する呼び名ではなくただの名詞であって、行為をさすものではないのです。言葉には多くを語らなくても、エレガントに、意味するところをおのおのが解釈する余地がある。あなたの言い分は、あなたの中のコンプレックス、本質から逸れた自意識過剰のアピールではないですか。言葉やハンディキャップを自己顕示に利用するのはやめてください。見下しているのはあなたの中にある心の闇です。

あれ、何の感想文だったかしらん。

有島読書ノート 33： 児童文学の「革命」性 ～『奇跡の咀』と『片輪者』

Ums.

有島武郎が子供の読者を想定して書いた最初の文学作品は『燕と王子』(M41?)であるが、これはオスカー・ワイルドの『幸福な王子』の翻案であり、特殊な状況下で書かれた作品である。詳細は、別の機会に触れることにする。

その次に書いたのは『真夏の頃』(T3.1)で、これはストリンドベルグ(※武郎の表記)からの翻案である。この作品についても別の機会に改めて触れる。

これら2作品のあとになるが、彼が児童文学を明確に意識して書いた最初の作品は『一房の葡萄』(T9.8)であり、以降、『基石を呑んだ八ちゃん』(T10.1)、『溺れかけた兄妹』(T10.9)、『片輪者』(T11.1)、『僕の帽子の話』(T11.6)、『火事とポチ』(T11.8)と、この2年間に6作品を立て続けに書いている。

この背景に、何があったのか。

この点について武郎の思想的・創作的観点から感じとるための対象作品として、小説『奇跡の咀』(T6.10)とそのほぼ4年後に書かれた児童文学『片輪者』(T11.1)を合わせて読む。

後者は、前者をもとに児童向けに書き直したものである。

1. 『奇跡の咀』(T6.10)

有島武郎特有の、と言うべきか、武郎にしては珍しい、と言うべきか迷うところだが、過激な暗喩の毒を潜ませた作品である。

主人公の「めくら」Aと「いざり」Bは、生まれつきの「障がい」を逆手にとって、Aは「預言者」、Bは「巡礼者」を騙り、まちの人々を騙して信用を集め蓄財していたが、それまで町の人たちによって海賊の手に渡らぬよう山中に隠されていた「障がい」を癒す奇跡の力を持つ聖マルチンの像が、長老の手で久しぶりに街に戻ってきた。その結果、Aの「めくら」とBの「いざり」が一気に癒ってしまう。

しかし、そのことを嘆き悲しみ途方に暮れる二人。

この物語の暗喩の要は、この結末部分にある。

A—地獄に行け。畜生！

B—おい炬火が見え出した。

A—炬火が？それはどっちだ。あっちの方じゃないか。

B—そうだ。

A—何！それじゃ俺の眼は少しづつ見え出したようだぞ。おや、あれが火の光というものかな。見てると眼の心が痛い。

B—俺の足が楽になったと思ったのもそれじゃいよいよ癒り出したのか知らん。

A—門はまだか。

B—まだ中々だ。

A—あの喜び狂う声はどうだ。

B—あの人混みを見ただけで俺は死じまひそうだ。

A/B—俺たちは本当にどうすればいいんだ。

(『奇跡の咀』P204より)

AとBは、「めくら」と「いざり」が聖マルチンの奇跡によって「癒る」というのに、なぜ嘆き悲しむのか。

AとBは、「めくら」と「いざり」であることによって、そうではない人々から偽善の哀れみや同情を買うとともに、「めくら」と「いざり」の真逆と観念されていた「予言」と「巡礼」を僭称することで、そうではない人々の偽善の後ろめたさという代償心理の隙を衝いて「予言」と「巡礼」を社会に信じ込ませることに成功していたのであった。

それがAとBにとっての「アイデンティティ」と言っても過言でないありようになっていたにもかかわらず、聖マルティンの奇跡によって僭称の全てが水疱に帰すことになった。

AとBが途方に暮れ嘆き悲しむのは、そのような状況があったからである。

AとBは、ここでは詐欺紛いの偽りの社会的存在形態を仮装しているが、「めくら」と「いざり」にしても、「予言」と「巡礼」にしても、その表象はある普遍的テーマの暗喩であるように思える。それは、どういうことか。

AとBは、詐称によって存在主張できる「アイデンティティ」、即ち「予言者」と「巡礼者」を獲得していった。それは、社会的階級の暗喩でもある。それが、聖マルチンの「奇跡」という、AとBにとっての「不条理」によって破壊される運命となったのだから、AとBの「アイデンティティ」にとってそれは「咀」としか言いようのないものであったろう。AとBのような僭称による「アイデンティティ」が、彼らを包む社会の要請つまり聖マルチンの帰還による「奇跡」を蒙る事態が発生したとき、いったいどのようにこれを受け止められるだろうか。

ここで想起するのは、この作品が発表された1917(大正6)年に、ロシアで二月革命と十月革命が起きたことである。武郎も含め当時の世界中の知識人に大きな衝撃を与えたロシア革命が、この作品の背景にあった。この作品全体を包む一種の寓意性、暗喩性は、そう考えると納得できる。町の人にとっての歓迎すべき「奇跡」、AとBにとって忌むべき「奇跡」とは、文字通り「革命」そのもの

の暗喩と捉えられないか。

武郎は無政府主義者として、多くの同時代知識人とは異なる視点からロシア革命に注目し、またロシア革命のボルシェヴィズムに対しては、多くの社会主義者たちとは一線を画した批判的評価を抱いていた。

階級的アイデンティティ、それは人間の存在様態として、本来ありうべからざるものであった。この物語で言えば、「預言者」「巡礼者」は、僭称された階級的アイデンティティであった。この擬態に、根源的な変化即ち本来の存在様態としてのアイデンティティ—ここでは「めくら」と「いざり」がそれにあたるが—を受容し可能にすることが、「革命」の根源的な期待値であったはずである。武郎は、「革命」をそのように心に描いていた。

しかし、町の人々の期待値はそれとも異なっていた。「めくら」「いざり」の存在様態をそのまま可視的に受け入れて町の中で支え合い存在し合うのではなく、一切の障がいがあたかも存在しないかのように、見えないように社会意識を偽装してしまう「奇跡」を人々は求めたのである。これは、聖マルチンに象徴されるキリスト教義にも内在する欺瞞であり、そのことを崇める町の人たちの偽善であった。

そのような矛盾を秘めた社会意識の高まりの中で、つまり、聖マルティンの帰還によって「奇跡」が起こり「障がい癒った」というのは、「障がい」が社会の中で不可視な様態を強いられることになったということである。「障がい」という人間存在の多様な様態を、あるはずのない不都合なものとして不可視なブラックボックスの中に押し込めたのが聖マルチンの「奇跡」である。それはすなわち、「めくらやいざりなどの障がい」という「人間存在の多様さ」をそのまま受容できる社会の可能性を追い求める「革命」本来の姿を、「障がい癒って、障がいのない社会になる」という美しい言辞による欺瞞に満ちた画一的イデオロギーの中に隠蔽してしまうことを意味した。ロシア革命に対してそのような欺瞞を疑っていた武郎の感性の正鵠は、その後のソビエト連邦の歴史が立証している。

つまり、AとBの嘆きは、二重の意味を帯びている

ひとつは、「預言者」「巡礼者」としてのいわば僭称された社会的階級が崩壊したことにより、彼らの現世の利益を喪失したことである。これが、物語としての直接の意味合いであり、「革命」の社会的現象としての側面である。

もう一つは、「奇跡」あるいは現象としての「革命」によって失った現世の利益と引き換えに得ることとなったものが、「社会に見えない障がい」言い換えれば「社会によってその存在が受容されない様態としての障がい」、つまり「あるものをないとするイデオロギーの中で歪められた民衆分断としての障がい」が、AとBを待ち受けていたのである。

AとBの嘆きは、この二重の意味において、現世的でありかつ本質的なものであった。

武郎は、これがロシア革命の根源的課題である、と受け止めたのである。

革命を求め、あるいは革命を忌避し、そのように革命に翻弄される社会的意識の深い闇を描こうとして、彼はこの作品を書いた。

現実に進行しているロシア革命をどのように受け止めたら良いのか、と彼は考えただろう。

「階級移行論」に深い疑問を抱いていた武郎にとって、「革命」による階級の存在そのものの消滅こそが理想であった。「第四階級」による権力奪取は、その後の「第四階級」自身による根源的自己否定によって階級消滅を導く入り口となるはずであった。それは、「障がい」が社会の中で可視化されたまま、その存在様態のまま受容される社会になることであった。「障がい」は、社会の中で階級が成立する根源的矛盾の一つの象徴として、そして、階級が消滅するプロセスに向けた「プロレタリアート（第四階級）の根源的自己否定」の基点の一つとなるものであった。武郎が米国留学中に学んだクロボトキンの無政府主義も、マルクスの「プロレタリアート」概念の本質も、そのような「自己否定」の無限の自己変革運動を導くものであった。そのプロセスに向かう転換が、AとBの僭称と嘆きの中に表現されたのである。

このあるがままの「障がい」、言い換えれば、素の自分、個性、アイデンティティ・・・の受容は、武郎が生涯模索し続けたテーマであった。

これを別の言葉で言い換えた彼の文章に触れて、論を次のステップに進めたい。

「私の父が亡くなる少し前に（お前これから重要な問題となるものはどんな問題だと思ふ？）と一種の真面目さを以て私に尋ねたことがある。それは父にとって或種の謎であった私の将来を、私の返答によって察しようとしたものであったらしい。その時私は父に答へて、労働問題と婦人問題と小児問題とが、最も重要な問題になるであらうと答へたのを記憶する」（『子供の世界』T11.5）

「障がい」から「ロシア革命」までは既に述べた。それは「労働問題」つまり「第四階級」に繋がる過程で階級移行否定論を内包し、男性と本質的に異なる女性の開花を目指す婦人問題を見据えて、さらにその先で「小児問題」を展望する。

やや強引なキーワードの連結だが、武郎の中では一貫した概念の連続性があったと思われる。

ここで彼が言う「小児問題」を、武郎にとっての児童文学という側面から辿ってみる。

2. 武郎と児童文学

「（※大正8年）9月6日夜、有島氏書齋にて」との前書きで始まる座談会の記録、『童話について（合評）』（T9.7）がある。『或る女（後編）』を発表した翌月に、有島武郎の他、生田長江、大庭柯公、堺利彦、長谷川如是閑、馬場孤蝶の6人が、表題の内容をテーマにかなり自由な雰囲気で見聞を述べ合っている。

「A (※有島武郎) : いや年齢に制限はいらぬ。何歳まででもいいと思うのだ。その子供がそのまま大人になり、その要求を徹底させようとするすると矛盾に出遭う。それに疑いが生じて来る。而してそこから始めて世界は改造される。

H (※長谷川如是閑) : そうです。純なものは子供の時から養わなければならない。大学ばかり改善しても何にもならぬ」(『童話について (合評)』 T9. 7)

ここには、武郎の「革命論」が述べられている。

子供の心が大人にもそのまま受け止められる社会、子供が矛盾と感ずる疑問をもとに世界が改造されていく社会。ここでの「子供」を、さらに「労働者」「婦人」「障がい者」に置き換えてみれば、彼が求めた「革命」の理想像がおぼろげに浮かんでくるだろう。

その観点から、児童文学についてさらに次のように言う。

「A (※有島武郎) : 子供に読ます時、「私は・・・して泣いた」と云うだけならいいだろう。

H (※長谷川如是閑) : それならいい。「それが悲しむべきことだった」とか何とか大人の心理で解釈したものではいけない。

A : 僕が心理的と云うのは子供に子供の心を標準とした心持ちを起すものを読みたいと云うのだ。

H : それを書くことは大人にはできないかもしれぬ。柱にぶつかる、憎い柱だと云う、それが子供の道徳だ。その道徳ならいい。書く時に大人が子供の心持ちにならねばそれは出来ない。」(同上書より)

有島武郎と長谷川如是閑は、非常に近いところに立って児童文学を論じている。

あるがままの子供の心をそのまま受け止める表現は大人にとって難しいことだが、しかし、次の引用の中で述べるように、大人の中に残っている子供の心を見出すことができれば、子供の世界を表現することは可能である、と武郎は含意している。

「私は、元来、人の持つて生まれた気稟といふものを信ずるのであります。人間は、誰も皆生まれた時已に其の人が成長後に現われる処の総ての特性を持つて居る様に見えます。結局はそれが生涯の内に、全部現われてゆくか、一部分より現れずに終るかと言うだけの相違があるだけで、それに何者かが新しく加えられるという事は、私は信じられません。それは私自身の経験が極めて明らかに其事実を證明してくれます。」(『子供は如何に教養すべきか』 T11. 1)

児童文学は、限定された狭い年代層の文学ではなく、むしろ大人向けの文学に欠落しがちな人間性の根源的本質を抱えた普遍的な文学領域である、と主張している。

またこのことは、武郎が「階級移行論」を否定する内在的根拠となっていることにも注意を払って

よい。主観性と普遍性が一体となった、自身の体験に裏付けられた思想であることがわかる。

このような「子供論」が『奇跡と咀』と結びついていることを示す、次の引用箇所にも注意しておきたい。

「此立場から私は自分の子供たちに対して居ります。私は三人の生得の本性に強い依頼を持って居ります。さうして其の本性の全體が内部的に傷け合うことなくのびのびと育てゆく様に仕向け度いものだと考えて居ります。教育というものも大切なものであるには違いありませんが、この本性の統一的な発展を遮ったり分裂させたり、停止させる様な教育は絶対的に除けたいと考えて居ります。親がするにしても、教師がするにしても、斯くのごとき結果に陥るのは恐るべき誤謬であります。何よりも子供に対して済まないことだと思ひます。」(同上書)

「私は子供の本性を尊びます。子供が、この世の中に生まれてきた時は、既にその成長の後に現れる色々な特性を持っている筈であります。・ ・ (中略) ・ ・ それ故に真に子供を愛するといふことはその天性を自由に充分に伸ばしてやることであると思ひます。」(『人の本性に就いて』 T11. 2)

「良心的に子供をとり扱った学校の教師は、恐らく子供の世界の中に驚くべき不思議を見出すだろう。大人の僻見によって、穢されない彼等の頭脳と感覚の中から、かつて発見されなかったやうな幾多の思想や感情が湧き出るのに遭遇するだろう。従来立場にある人は、かくの如き場合に何時でも、彼ら自身の思想と感情とを以て、無理強いにそれを強制しようとする。このやうなことは許すべからざることだ。子供をして子供の求めるものを得さしめる。それはやがて大人の世界に在る新しいものを寄与するだろう。さうして、歴史は今までであったよりも、もっと創造的な姿をとるに至るだろう。」(『子供の世界』 T11. 5)

子供の「生得の本性」を尊重することは「革命」に至る道において不可欠である、と読むことができる。「子供」であれ「女性」であれ「障がい者」であれ「第四階級＝労働者」であれ、その存在様態の可視化と固有の存在意義の尊重が、新たな歴史を創造する「プロレタリア革命」の主体形成としてもっとも重要であると、武郎は考えている。

『奇跡と咀』は、この「生得の本性」に寄せる深い信頼がその本質において「めくら」と「いざり」を肯定する作者の思想性を物語っている。この点から、聖マルチンの「奇跡」が恐るべき「誤謬」であるとした暗喩の構造を表現しているのである。

武郎がこの点に最大限の力点を置いて児童文学に邁進した時期が、大正9年から11年にかけての作家人生後期と重なっている

「A：私が一度「一房の葡萄」を書いた動機は一體今までの童話には子供に読ますものとしては子

供の心持ちを標準として書いたものがない様に思えたので書き始めたのです。」(『童話について(合評)』 T9. 7)

そして、『子供は如何に教養すべきか』と同時期に書かれた児童文学作品が、『片輪者』(T11. 1)である。

3. 『片輪者』(T11.1)

『片輪者』の筋立てや展開は、『奇跡と咀』とほとんど同じである。

しかし、いくつかの点で異なっており、それが武郎の求めている大人向けの小説とは異なる児童文学の特徴である。

たとえば、二人の主人公の名称、『奇跡と咀』のAとBが、『片輪者』ではジャンとピエールとなっている。前者『奇跡と咀』では、二人の人格的個性より「めくら[≠]預言者」「いざり[≠]巡礼者」という属性の変容に焦点を当てて物語を構成し、AもBも人格というより概念としての名称に近い位置付けを有している。しかし、後者『片輪者』では、二人を抽象的概念としての存在ではなく人格としてのリアリティを子供に受け止めてもらいたい、物語の主人公に感情移入して欲しい、という子供の感性に対する願いが込められているのを感じる。

また、前者において重要な役割を担う脇役の甲(母親)と乙(娘)は、AとBを取り巻く社会の意識を代理する存在として、その人間心理的屬性も含めて描写されており、小説としての奥行きを感じさせる。しかし、こうした人格的存在の心理描写は子供には共感しにくい領域なので、後者においては主人公と周辺コミュニティとの交渉というデリケートな表現のほぼ全てが捨象され、物語の主要なベースラインが子供に真っ直ぐ伝わりやすい様に工夫されている。

そして、エンディング。前者と後者を比較してみよう。

「俺たちはほんとうにどうすればいいんだ。」(『奇跡と咀』より)

「一人は眼をこすりながら、一人は脚をさすりながら、おいおいといって泣き出しました。」(『片輪者』より)

この違いは、微妙ではあるが明確だ。

前者では、困った事態に直面した主人公たちが、どうにか事態を打開したいが打つ手が見えないという状況を迎えた。これまで詐称してきた偽りのアイデンティティ故に、聖マルチンの奇跡によって「障がい」が癒ってもこれまでの嘘によって社会からより深刻な迫害を受けるだろうという、見えなくなったその闇の中で一層厳然と存在し続ける「見えない障がいに対する差別」に苦しめられる事態に晒されることを示唆した結末である。

後者では、前者の様な複雑な「不都合な真実」とは一切無縁に、奇跡による変化をあるがままに受け止めて「泣き出した」と、その不可解さを包み込んだ感情移入を子供読者から誘っている。「泣き出した」主人公二人を、子供読者がどの様に受け止めて自分の気持ちや思いを重ねるのか、一切の予断を感じさせない素の表現で結末を描いている。この結末に接した子供読者はもちろん、大人の読者も自身の予断的感想を一旦脇において、泣いている主人公の近くに寄り添ってみようと感じるのではないだろうか。

武郎は、この『片輪者』を挟んで約2年間に七篇の児童文学を書いている。

それら作品のどれも、エンディングはデリケートな複雑さと率直な潔さが渾然とした、不思議な透明感を漂わせている。

文学による「革命」性とは、児童文学においてもっとも初元的でかつもっとも素直な特性であることに武郎は気づき、そのことを梶子に自身の文学創造を再構築しようとしたのではないだろうか。

大正11年6月17日、武郎の描いた児童文学4篇を所収した作品集『一房の葡萄』が発行された。彼がこの作品集発行に託した第一の目的は、その日のうちに実現した。

「帰家したら『一房の葡萄』十五冊が来ていた。表装中々よく出来ている。子供三人が大変静かだと思ったら熱心に読んでいてくれるので大変嬉しく思ふ。」(『最後の日記(一)』T11.6.17より)

武郎にとっての児童文学は、三人の子供と亡き妻安子の存在を抜きにはあり得なかった。

それは、武郎自身のあるがままの姿を、安子や子供との関係の中に模索し続ける旅を意味した。

それは、彼が求め続けた自身の文学における「革命」の可能性に賭けた闘いでもあった。

この作品集『一房の葡萄』発行の後に、彼は最後の児童文学作品『火事とポチ』(T11.8)を発表する。

農場解放宣言(T11.7.18)とほぼ同時期の擱筆であった。